

教養としての宗教学

■選者紹介

宮嶋俊一 (みやじま しゅんいち)

北海道大学大学院文学研究院教授

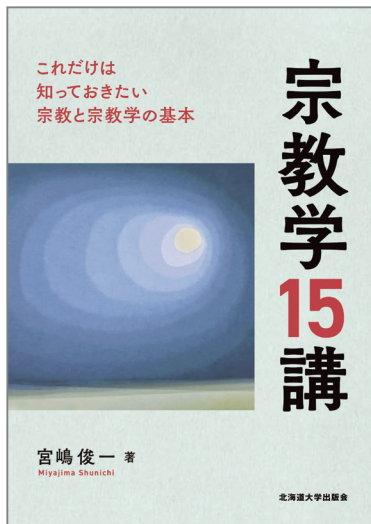
【専攻】宗教学

■選者の著作

宮嶋俊一著『宗教学15講：これだけは知っておきたい宗教と宗教学の基本』北海道大学出版会、2026年

宗教とは何か、宗教は死後世界をどのようなものと考えてきたのか、宗教は性差別やカルト問題とどう関わっているのかなどの、宗教についての15のトピックをわかりやすく解説。古典的な理論から現代的な課題まで網羅的に扱い、大学レベルの教養が身につく宗教学入門書の決定版。

定価：3,080円 (本体価格2,800円+税)
ISBN：978-4-8329-6910-0



■選書リスト

01 レオン・フェスティンガー、ヘンリー・W・リーケン、スタンレー・シャクター著／水野博介訳／釈 徹宗解説『予言がはずれるとき 新装版：この世の破滅を予知した現代のある集団を解明する』勁草書房、2025年

UFOカルトの指導者・キーチ夫人の元に、宇宙人からメッセージが届く。「大洪水がおこり世界は滅びるが、UFOがやってきて、信者たちは救われる」。だがその日になっても、洪水は起こらず、UFOも訪れない。その時、何が起こったのか……。これは小説の話ではない。本書は研究者たちによる潜入調査の報告であり、「認知的不調和」という社会心理学の理論を一躍有名にした研究書である。ドキドキしながら読める研究書としてお薦め。

定価：5,500円 (本体価格5,000円+税)
ISBN：978-4-326-25181-0

02 ユペチカ著／西森マリー監修『サトコとナダ』星海社 (星海社COMIC)、2017-2018年 (1～4巻)

アメリカで大学生活を始めた日本人のサトコと、ルームメイトであるサウジアラビア出身のムスリム女性ナダとの間に起こるさまざまな出来事や二人の友情をあたかくコミカルに描いた作品。イスラムの生活や思想を理解するための入門書としてすばらしく、異文化交流・異文化理解のヒントが詰まっている。椿原敦子・黒田賢治著『『サトコとナダ』から考えるイスラム入門：ムスリムの生活・文化・歴史』(星海社新書、2018年)もお薦め。

【COMIC】

定価：各巻704円 (本体価格640円+税)

〈1〉ISBN：978-4-06-369572-4

〈2〉ISBN：978-4-06-510770-6

〈3〉ISBN：978-4-06-511432-2

〈4〉ISBN：978-4-06-513825-0

【デジタル版】講談社発行

定価：各巻792円 (税込)

(2026年4月28日現在@ BookLive!ストア)

03 石牟礼道子著『新装版 苦海浄土』講談社 (講談社文庫)、2004年

水俣病事件を描いた石牟礼道子の代表作であり、近代日本文学の金字塔である。そこには、凄惨な現実と直面した人々の苦しみやいのちの尊厳、そして魂の救いを求める祈りが、詩的な文体で紡がれている。聞き書きを独自の言葉へと昇華させた石牟礼道子は巫女と称されることもあるが、彼女によって描き出された物語には、水俣の人間や自然、そして信仰の原風景が浮き彫りにされており、宗教学を学ぶ出発点としての必読書である。

定価：913円 (本体価格830円+税)

ISBN：978-4-06-274815-5

04 倉塚 平著『ユートピアと性：オナイダ・コミュニティの複合婚実験』中央公論新社 (中公文庫)、2015年

オナイダ・コミュニティとは、1848年、ジョン・ハンフリー・ノイズによってニューヨークに設立されたキリスト教系の共同体 (コミュン) である。全メンバーが互いに結婚関係にあるとされる「複合婚」という独自の制度を採用し、また優生学的な生殖実験 (優秀とされる者同士だけに子どもをもうけることを認める) が行われた。今日であれば「カルト」と呼ばれるような共同体であるが、本書はその内実を克明に描き出している。

【文庫版】2015年/品切

定価：1,100円 (本体価格1,000円+税)

ISBN：978-4-12-206081-4

【デジタル版】2015年

定価：1,100円 (税込)

(2026年4月28日現在@ BookLive!ストア)

05 岸本英夫著『死を見つめる心』講談社 (講談社文庫)

戦後を代表する宗教学者、岸本英夫の癌闘病記。今日と異なり、癌は不治の病であっ

たゆえ、癌宣告された彼は絶望の淵に立たされる。それまで客観的・価値中立的に宗教を研究してきた彼は、自らの死に実存的・主体的に向き合い、「死はわかれの時」という彼なりの死生観に到達する。本書はその戦いの記録であると同時に、世界の諸宗教の死生観に関する学者らしい認識も語られている。本書には宗教学者の生き様が現れている。

【文庫版】1973年

定価：660円 (本体価格600円+税)

ISBN：978-4-06-134024-4

【デジタル版】2019年

定価：660円 (税込)

(2026年4月28日現在@ BookLive!ストア)

06 山田仁史著『新・神話学入門』朝倉書店、2017年

神話と神話学を学ぶための入門書。授業に参加している感覚で読める。世界各地の神話が豊富に紹介されているだけでなく、それらがどのように研究されてきたのか (神話学) についての解説も丁寧になされている。参考文献も充実しており、専門的な学びへの入り口として有益だ。なお、世界の神話についてももう少し手軽に学びたいという人には、松村一男著『世界のはじまりの神話学』(角川選書ビギナーズ、2025年)もお薦め。

定価：2,750円 (本体価格2,500円+税)

ISBN：978-4-254-50025-7

07 ルードルフ・オットー著／華園聰磨訳『聖なるもの』創元社、2005年

ドイツの神学者、宗教哲学者ルードルフ・オットーの名著。1917年に出版された原著は今日でもドイツで読み継がれているし、日本語訳も数種出版されてきた。オットーは宗教の本質をヌミノーズと名付けた。それは「聖なるもの」に含まれる非合理的な要素によって特徴付けられる。恐れ多くて近寄りたいたいのだけれど、惹きつけられてしまう、そのアンビバレントな感情が宗教体験の本質であるとオットーは論じている。

定価：3,850円 (本体3,500円+税)

ISBN：978-4-422-13005-7

08 藤原聖子編著『日本人無宗教説：その歴史から見えるもの』筑摩書房 (筑摩選書)、2023年

「日本人は宗教的なのか、無宗教なのか」といったテーマに関する書籍は数多く存在するが、こうした議論は宗教をどう定義するかの問題であって、結論は出せない。だがこうした議論には時代によって一定の傾向がある。本書はこうした傾向を歴史的に辿ったものである。日本人の宗教性というテーマに関心がある人には、数多くの書籍を読む前に、まず本書を読むことをお薦めする。

定価：1,870円 (本体価格1,700円+税)

ISBN：978-4-480-01773-4

09 小河 陽訳『ヨハネの黙示録』講談社 (講談社学術文庫)、2018年

『新約聖書』に収められたヨハネの黙示録は、世界の終わりと再生を壮大なヴィジョンで描き出す。子羊 (イエス) によって7つの封印が解かれ、七人の天使が七つのラッパを吹く。その度に人類に天変地異などの災いがもたらされる。666 という不吉な数字と獣たち、人々を惑わす偽預言者、ハルマゲドンや千年王国……映画や小説みたいだと思ってしまうが、逆だ。数多の作品のイメージの原泉となったのが、この『黙示録』なのだ。

定価：1,320円 (本体価格 1,200円 + 税)
ISBN：978-4-06-292496-2

10 ファン・ヘネップ著 / 綾部恒雄・綾部裕子訳『通過儀礼』岩波書店 (岩波文庫)、2012年 【品切】

誕生祝、成人式、結婚式、お葬式といった人生の節目節目で行われる通過儀礼を分析した研究書。こうした儀礼はいずれも「分離」「過渡」「統合」という3段階から構成されていることを指摘した。生と死、聖と俗、昼と夜、男と女など、私たちは物事を二項対立で捉えがちだが、その間の状態 (過渡期) に注目したのが、本書の重要なポイントだと思う。そうすることで、二項対立で考えていては見えてこないものが、見えてくる。

定価：1,034円 (本体価格 940円 + 税)
ISBN：978-4-00-342191-8

11 ウィリアム・ジェイムズ著 / 榎田啓三郎訳『宗教的経験の諸相 (上・下)』岩波書店 (岩波文庫)、1969-1970年

ジェイムズはプラグマティズムの哲学者として有名。本書は宗教心理学の古典的名著で、ギフォード・レクチャーという講義の記録。回心や神秘体験などの研究書として知られるが、本書にたくさんの宗教体験談が収められていることに注目したい。ジェイムズは「神の声を聴いた」とか「光の中から天使が現れてきた」といった不思議な体験談を数多く集めて、それらを分析し、そこからいくつもの理論を導き出したのである。

(上) 定価：1,200円 (本体価格 1,100円 + 税)
ISBN：978-4-00-336402-4
(下) 定価：1,353円 (本体価格 1,230円 + 税)
ISBN：978-4-00-336403-1

12 櫻井義秀著『信仰か、マインド・コントロールか：カルト論の構図』法蔵館 (法蔵館文庫)、2023年

櫻井義秀はカルト研究の第一人者にしてフロントランナーである。カルト問題の研究書や一般向け書籍を数多く執筆しており、その中から1冊を選ぶのは難しかった。本書に収録されている論文の多くは2000年代に執筆されたものであり、最新の内容というわけではないが、カルト研究のための基本概念についても説明されており、現在の旧統一教会問題などを考えていく上で、出発点とすべき書籍であると考えた。

定価：1,210円 (本体価格 1,100円 + 税)
ISBN：978-4-8318-2647-3

13 島菌 進著『痛みとケアのスピリチュアリティ：死と再生の新たな形』朝日新聞出版 (朝日選書)、2026年

宗教学・死生学の第一人者の最新刊。スピリチュアルを何やら怪しげなものとして誤解している人がいるかもしれないが、本書はそれを「人間の魂の次元に人生の意味や価値を求めるもの」と捉える。現代におけるスピリチュアリティを、死にゆく人の痛みとケア、看取りやホスピスケア、喪失とグリーフケア、魂を尊ぶ水俣病、依存症や嗜癖とかかわる自助グループの広がり、ひきこもりの支援など、多様な視点から論じている。

定価：1,870円 (本体価格 1,700円 + 税)
ISBN：978-4-02-263146-6

14 岡本亮輔著『聖地巡礼：世界遺産からアニメの舞台まで』中央公論新社 (中公新書)、2015年

巡礼研究の専門家による、わかりやすい入門書。伝統的な四国八十八ヶ所巡礼やスペインのサンティアゴ・デ・コンポステーラ巡礼から現代的なアニメの聖地巡礼まで、幅広く扱われている。青森県三戸郡新郷村にある「キリストの墓」のようなユニークな場所も採りあげられている。岡本の著作は他にも中公新書に収められており、『宗教と日本人：葬式仏教からスピリチュアル文化まで』(2021年) や『キリスト教入門の系譜：内村鑑三、遠藤周作から渡辺和子、オンライン教会まで』(2026年) などもお薦め。

定価：924円 (本体価格 840円 + 税)
ISBN：978-4-12-102306-3

15 宮嶋俊一著『祈りの現象学：ハイラーの宗教理論』ナカニシヤ出版、2014年 【品切】

祈り研究の古典的名著としてフリードリヒ・ハイラー『祈り』(深澤英隆監修 / 丸山空大・宮嶋俊一訳、国書刊行会、2018年) がある。私も訳者のひとりであり、ぜひお薦めの一冊にしようと思っていたら、品切れとなっていた。そこでハイラー研究書である拙著を挙げることにしたが、こちらも品切れであった。『祈り』はさまざまな時代・地域で見られる祈りのカタログのような書籍だが、それを批判的に分析したのが拙著である。

定価：2,860円 (本体価格 2,600円 + 税)
ISBN：978-4-7795-0812-7

16 清水俊史著『ブッダという男：初期仏典を読みとく』筑摩書房 (ちくま新書)、2023年

ブッダに関する伝承は数多く存在している。だが、ブッダは本当はどんな人だったのだろうか。著者は、仏典に書かれている内容から神話的な装飾を取り除くことで、業や輪廻を否定した平和的人物というこれまでのブッダ像とは異なるブッダの姿を描き出す。論争的な書物であり、賛否両論を巻き起こしたが、宗教 (この場合は仏教) を歴史学的・実証的に研究しようとする著者の姿勢には学ぶべきものが多い。

定価：968円 (本体価格 880円 + 税)
ISBN：978-4-480-07594-9

17 中村圭志著『巫宗教：オカルト、スピリチュアル、疑似科学から陰謀論まで』集英社インターナショナル (インターナショナル新書)、2023年

宗教学者はキリスト教や仏教など誰もがそれを宗教とみなすような現象ばかりではなく、むしろそれらの周縁にある現象に興味を示す。著者は、陰謀論、妖精写真、コックリさん、動物磁気、千里眼や念写、UFO、ニューエイジ、エスパー、臨死体験、爬虫類人、Qアノン、反ワクチンなどなどの現象を「巫宗教」と呼び、それらを宗教学的に分析し、人類の「裏の思想史」の系譜を明らかにする。

定価：1,056円 (本体価格 960円 + 税)
ISBN：978-4-7976-8121-5

18 藤本龍児著『宗教のアメリカ』岩波書店 (岩波新書)、2026年

近年、アメリカ社会を宗教という観点から分析した書籍に注目が集まっている。本書もそうした一冊であるが、現代的な出来事背景にある歴史的な事象をわかりやすく説明すると同時に近年の宗教社会学の動向もしっかり押さえている。加藤喜之著『福音派：終末論に引き裂かれるアメリカ社会』(中公新書、2025年) はアメリカ社会を宗教学的に分析した書籍としてベストセラーとなったが、その次に読む本として勧めたい。

定価：1,276円 (本体価格 1,160円 + 税)
ISBN：978-4-00-432107-1

19 藤井修平・中分 遥・白岩祐子・荒川 歩編『宗教認知科学 (CSR)：認知・心理・進化の視点から宗教を読み解く』新曜社、2025年

(拙著でもとりあげたが、) 近年、宗教を科学的に研究しようという動きが強まっている。具体的には、神経科学や進化生物学、文化進化論や文化系統学などの成果を宗教研究に生かそうという動きである。本書はそうした近年の動向に関するガイドブックである。理論的な説明だけでなく、「死後世界」「呪術」「お守り」「妖怪」「都市伝説」など興味深いトピック満載である。参考文献も充実していて、学びを深めていくために大変有益である。

定価：3,080円 (本体価格 2,800円 + 税)
ISBN：978-4-7885-1900-8

20 加藤 隆著『『新約聖書』の誕生』講談社 (講談社学術文庫)、2016年

キリスト教の聖典は聖書であり、旧約聖書を新約聖書という2種類の文書集からなっている。本書は、そのうちの「新約聖書」がいかんして成立したのか、つまりそこに収められている文書がいつ、どのような目的で書かれたのか、そしてなぜ現在のこのような形でまとめられたのかを論じている。キリスト教を歴史学的に見ていくために有益な書籍。同じ著者による『旧約聖書の誕生』(ちくま学芸文庫、2011年) もお薦め。

定価：1,496円 (本体価格 1,360円 + 税)
ISBN：978-4-06-292401-6